
プリンプタウンに飛ばされた海賊たち

歌紅夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンプタウンに飛ばされた海賊たち

【Zコード】

Z2078BA

【作者名】

歌紅夜

【あらすじ】

銀河の霸者との決着がついた6人。数日たって、やっとお宝探しにでた。ナビイの占いでは、『異世界の人間に会つてくるべし』と出た。その異世界の人間の正体は……？

プロローグ

ある種やかな口のこじだつた。バスコとサリーがある路上を歩いていたとき、ダマラスに遭遇。ダマラスはバスコの前に立つて言った。

「バスコ、お前に海賊の抹殺を命じる。」

ダマラスはバスコの首に剣を突きつける。バスコは苦い顔をして、

「嫌だと言つたら?」

沈黙。サリーはダマラスに襲い掛かる。ダマラスはなぎ払つた。

「キーッ…。」

サリーの隣にしゃがんだバスコ。ダマラスはまだ首に剣を突きつけたままだ。そして、ダマラスはこう言つた。

「てめえ拒否すれば、貴様の命は無い。」

バスコは、どうすることも出来ないと考えた末、

「分かりましたよ、ダマラス様。（チッ）」

小さく舌打ちをした。これが新しい事件の始まりだった。

『レッツお宝ナビゲーター。』

ナビイの占い、お宝ナビゲート。宇宙最大のお宝についてナビゲー

トする。ハカセの頭に衝突し、占い結果が出た。

『異世界の人間に会つてくるべし。』んなの出ましたけど?』

いつもの通り占い。5人は鎧のほうを見た。

「知りませんよ。今度は異世界ですか……?」

以前の「銀河の霸者に注意するべし」の時にも、鎧の方を見て、頼ろうとした。しかし、何も答えられなかつた。しかたなく、いつもの通りに町へ出ることにした。

町へ出て行つた6人のうち、ルカ・ハカセ・アイム・鎧の4人は普通に街を歩いていた。ヒントになりそうなものが無い。そんななか、目の前に現れたのは……、バスコだつた。初めてあつたとき以来、大いなる力に関すること以外で会つたことは無い。マーベラスとジヨーは今、目の前にいない。

「あれ? マベちゃんいないの?」

感じとしてはいつものバスコ。そしてバスコは人間体から、怪人体へと変わり、戦闘モードになつた。そのときに、ハカセは(大いなる力に関係があるのかも)と確信した。でも、目の前には怪人体のバスコ。戦わないわけにはいかない。

「「「「ゴーカイチェンジ!」」」

4人で無謀な戦いに挑んだ。バスコは今、レンジャーキーを持つていない。

「サリー。」

サリーを召喚したバスコ。

「皆さん、ヒーローインジャーで行きましょう!」

と鎧はショリケンジャーのキーを。しかしアイムたちは、別のキーを取り出した。それは何かと云ふと…

「――」

「シユーリケンジャー!」

「カイチエンジャー!」

「カーライシルバー

「カーライシルバー!」

その他3人

何かどぞれている。やはり合わないときは合わない。鎧はスーパー戦隊を愛する男として、ツツ「ミミ」みたい。でもそんな余裕が無い。

「だつて、二ンジャでしょ?」

鎧の気持ちが何一つ分からない3人だった。鎧はもう、どうでも良くなつたので、サリーとの戦いを始めた。

「カクレ流、大地がくれの術!」

ハカセイン・二ンジャブラック、かいしんの一撃!

「キイ……」

バスコ、舌打ち。バスコは剣を握った。

「じおおおおりやー!」

剣を振りかざす。その時だつた。上から銃弾が降つてくる。バス口にその銃弾が当たる。マーベラスとジョーだ。

「あれ、わざと来た? アベちゃん。」

バスコは、もう一度剣を振りかざす。剣には凄い力。

一
てめえ、何をする気だ

「ちよつと逆えてもうらおうかなって。じゃあ、いつてちよつしゃいー！」

横に剣を振る。すると一気に次元の亀裂が出来、その中に6人は吸い込まれていった。

「おっさん、これでいいの？」

ビルの上に立っていた、ダマラスに聞いた。

「戻つて来られないんだろうな？」

「大丈夫。戻ってきた奴一人もいないから。」

バスコは人間体に戻った。サリーをつれ、船へ戻ったバスコ。ダマラスは、アクドス・ギルに報告のため、戻つていった。

1：「J、JR異世界！？」（前書き）

キャラ設定は、マーべラス～アイテムまでは同じですが、
鎧…実はゲーマーだった。
という設定でお願いします。

1：「」、世界！？

「　「　「　「　「　「わあああああー。」　」　」

ゴーカイジャーの6人が上から降つてくる。それを見ていた、たまねぎなんだか、鬼なんだか分からない生き物がそれを見ていた

「オン！？」

すぐさま避けようとしたその時、ハカセが謎の生命体の上に落ちて下敷きにした。その上に、マーベラス 鎧 ジョー ルカ アイムの順で落ちてきた。

「皆さん、大丈夫ですか？」

「あたしは大丈夫。でも…まさか一番初めにハカセが落ちて行くなんてね。」

ハカセはやつと立ち上がれた。その時、ジョーたちは一歩ずつ引いていった。

「え？ 何？」

と下を見たハカセ。何か踏んでいたことにやつと気付いた。

「オン！ オオオン！（訳：おいら前、なんてことをしてくれんだ！）」

しかし何を言いたいのかさっぱり分からぬ6人。

「あ、おにょんだ！」

赤い帽子をかぶつた少女は謎の生命体のこと、「おにょん」と呼んだ。

「あの人たちは？」

おにょんに聞いた。

「オン？ オオオオン！（あいつらか？ 突然上から落ちてきた。）」

その少女は、言いたいことが分かるらしい。

「え？ 上から？」

と、6人を見た。

「うーん。別の世界から来たとなると…。りんごとアルルの同類かな？」

いきなり訳の分からない単語を出された。鎧は一つ思い当たることがあった。

「もしかして…、君はアリティ？」

「え？ 何で分かるの？」

「いや…、その。マーベラスさん、こゝは「ふよふよ」の世界です

「ふよふよ。」「ふよ」と呼ばれる物体を同色4つ繋げて、消すことを勝負としている。

「じゃあ、これはプリンプタウンのことで？」

「そうだよー。彼方たちのは異世界の人間？」

「そうー俺は、伊狩 鎧一ちよつとした事故でこの世界に飛ばされてしまったんだ。」

鎧はここ来るまでをアリティで説明した。

「へえー。じゃあ、この世界と似たようなゲームがあるから私たちの名前が分かるんだね。でもきっと…」

「…。この世界そのものが、ゲームなんだと思ひ。」

アリティはやう言った。5人（鎧を除く）はゲームの世界に入つてしまつたといつことでちょっとヒヤッとしたのだった。

「血口紹介がまだだつたな。俺はマーべラスだ。」

「…。ジローだ。」

「あたしは、ルカー。」

「私、アイム・ド・フューネーと申します。これはハカセをさです。」

アイムはハカセも同時に紹介した。

「ここに来るまで、たぶんマーベラスたちは、ふみを消す力がついたと思うだ。」

説明しよう。マーベラスたち6人は、ここに来る最中に白い光を浴びた。それは、ふみを消す力なのである。

「ふよつて、どうやって消すの？」

ハカセはアミティに聞いた。

「同じ色のふよを4つ繋げれば消えるよー。」

「同じ色のふよ? 例えば…。この色のふよを4つ集めればいいってこと?」

鎧は緑色のふよを持ってきた。

「その通りだよー。」

何か別の女子来たあああああああー

1：「、」異世界！？（後書き）

？？？「僕の扱いひどいよーー！」

アミティ「次に期待しよう、ねーー！」

「あ、アルル！」

「アルルって、初代ふよふよの主人公のアルル・ナジャ！？」

アルルは首を傾げる。

「あ～じゃあ、ちゃんと説明するからー！」

と、アミティはさつきあったことを説明した。そして、アルルと同じように、異世界の人間だということを。

「なるほど。でも、僕とは違う世界だよ。」

「そうだよね。じゃあ、りんごに聞いてみようか。」

と、いつとて別の場所に移動。商店街にやつてきた。

「アミティとアルルと、見慣れない人たちだね。でもどつかで見たことがある気がする。」

この少女は、人名などを覚えるのが苦手だが、頭の回転は速い。

「あ、少なくとも銀のジャケットの人にはお世話になつた…鎧さんですね。」

りんごを持った少女、りんごはやつひと言つた。

「あ、はい。そうですね。りんごがやんむじの世界に入っていたんだね。」

そこで、話があつてこるとこひの申し訳ない。どうせこここの世界に来たのかを説明してもうひつて。

「あ、私ですか？私は……りす先輩の爆発に巻き込まれてこの世界に来たんだよ。」

と、言つわけでその、りす先輩こと、りすくま先輩に会つに行つた。

「おや、りんご君に鎧君ではないか。どうしたのかね。」

「それが、鎧さんもこの世界に飛ばされちゃつて。だから、この世界に来た過程を説明して欲しいんですけど……。」

「分かつた。では鎧君、私とふよ勝負をしようつではないか。」

「了解ー・レッシー。」

「ふよ勝負とこひつ。」

「こひでもわけの分からぬ話、破裂。

3・ヒントだよー

対決種目はぶよぶようじゆ。太陽ぶよを使い消してゆく。鎧、4連鎖。りすくま先輩、4連鎖。ほぼ互角である。周囲から歓声が渡っている。

「鎧君、腕を上げたようだね。」

「つすぐま先輩こそ!」

マーベラスたちは鎧とつすぐま先輩の戦いを眺めていた。

「ああやつに戦えばいいのね。連鎖つていつの組めば勝てる確率が上がるってことだ。」

「楽しそうですね。」

いや、眺めている場合じゃないでしょ。

「では、俺の最高連鎖! 行つてみよう!」

8連鎖。りすくま先輩5連鎖。鎧の勝ちだ。鎧はりすくま先輩からここに来るまでどうしていたのかを聞いた。

「じゃあ、実験に失敗して気付いたら飛ばされたということですね。」

「

今のところ、この事件は迷宮入りの気配。

「後は…どうする？」

ルカはマーべラスに聞いた。

「しかたねえ、暫らくプリンプタウンに居座るか。」

「でも…。ガレオンが無いけど？」

ハカセは辺りを見回した。さつきは地上戦で飛ばされたので、ガレオンはない。ということは、ナビィが一人で残っているということだ。

「なら、ここからやつてみるか？」

「え～！？無理だよお、やめて置こうよ！」

ハカセはビビりながら、止めた。しかしマーべラスは、カセが止めるのを気にせず、モバイレーツに5501と打った。

「『～カイガレオン～』

6人は驚いた。まさか次元を超えてこの世界にやつてくるとは。それ以上に、アルル・アミティ・りんご・りすくま先輩は驚いていた。

「あ、あれ…船ですよね？」

りんごは、幽霊とか科学的に存在しないものなのではないかと思い、りすくま先輩の影に隠れた。

「安心しろ。俺たちの船だ。」

「い、いや安心ひひじやなこよーあつえないよー?呼び出しつくる
なんてー!」

「あたしたちもびっくりだよー。」

アルルとルカが言い合ってこなったことは置いておいて。船が来
れたということは、元居た世界に帰れる可能性があるということだ。
バスコがガレオンが船で時空を超えるところを見た。

「まさか!? そんなことば一度も無かつたのにー?」

バスコは次元の亀裂をふさいだ。

その影響はプリンプタウンからも確認できた。

「嘘、アレじや戻れないよー。」

「ふよ勝負をしながら奪える」とこぼしそうに、マーべラスさん。

アイムは、マーべラスのまづを見た。

「やうだな。ふよ勝負も面白やうだしな。」

ガレオンは町外れのまづで止め、この世界から抜け出すため、情報を
を集めながらふよ勝負をすることにした。アイムは疑問に思ったこ
とがあった。

「マーべラスさん、ここが異世界だとするのなら、ナビヤの占いも
ここにあるのかもしだせんよ? 抜
け出す方法と同時に、大いなる力も探してみたまうが良いのではな

いでしょうか。」

そもそも、5人は大いなる力のことすら忘れていた。

「ああああああああああああああー！？ そつかー！」 這是異世界だった
あ！？」

宇宙海賊たちは、元の世界に帰ると大いなる力のヒントも探し始めた。

3・ヒントだよ！（後書き）

大いなる力と関係あるのか…。次回、

登場！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2078ba/>

プリンプタウンに飛ばされた海賊たち

2012年1月8日18時47分発行